

第6講：115「おたすけを一条に」

この逸話について学ぶまえに、まず、この逸話を読ませていただきたい。

真明組周旋方の立花善吉は、明治十三年四、五月頃（陰暦三月）自分のソコヒを、つづいて、父の疝気をお救い頂いて入信。以来数年間、熱心に東奔西走しておたすけに精を出していたが、不思議なことに、おたすけにさえ出れば、自分の身体も至って健康であるが、出ないでいると、何となく気分がすぐれない。ある時、このことを教祖に申し上げて「何故でございましょうか。」と、伺うと、教祖は、

「あんたは、これからおたすけを一条に勤めるのやで。世界の事は何も心にかけず、世界の事は何知らいでもよい。道は、辛抱と苦勞やで。」

と、お聞かせ下された。善吉は、このお言葉を自分の生命として寸時も忘れず、一層おたすけ一条に奔走させて頂いたのである。

立花善吉とその逸話

まず、この逸話に出てくる立花善吉という先人は、明治20年（1887）に30歳のとき、身上のさわりをいただいている。そのとき、「おさしづ」のお言葉をいただいたが、「おさしづ」の割書には、「明治二十年 立花善吉三十才身上願」と記されている。その割書から、善吉は安政4年（1857）の生まれである。善吉の父親の名は清兵衛、兄には徳兵衛と宗吉がいた。現在の大阪市西区本田3丁目に住んでいたという。この先人はソコヒのために失明同様になり、また父親の清兵衛は、疝気のために足腰が立たなくなっていた、そこで、後に真明組講元となる井筒梅治郎におたすけを願ったところ、父親の疝気は3日経たない間に治り、善吉の目も一月足らずで治るといご守護をいただいた。明治13年陰暦3月のことであった。その後、善吉青年は、昼は魚の行商、夜は夜鳴きうどん屋をしながら、おたすけに出かけていた。この逸話に記されているように、教祖からお言葉をいただいて、なお一層、おたすけに奔走するようになった。善吉は神戸へお道の教えを伝えたという。

また、この先人には、次の逸話も伝えられている。明治14年ごろ、神戸の今出在家町という漁師町に、女髪結い師の魚田やすという婦人がいた。3歳になる娘すえがソコヒにかかり、ほとんど失明に近い状態であった。ところが、善吉のおたすけで、目が見えるようになった。やすはとても喜んで、どこへ行っても、「たすかった、たすかった、見えない目がたすかった。天理王命様は大した神様や」と語り歩いたという。

人間の本来的なあり方

善吉は、父親の疝気も自分のソコヒも鮮やかにご守護いただいて、親神のご守護もよく分かり、おたすけに出ていた。しかし時折、心に曇りが出てきて、おたすけに出ることを逡巡することもあった。そうした折、おちばに帰り、教祖の言葉をいただき、善吉は神一条の心、たすけ一条の心で、おたすけに出るようになった。善吉は教祖からお言葉をいただくまでは、「おたすけにさえ出れば、自分の身体も至って健康であるが、出ないでいると、何となく気分がすぐれない。」そういう日々をすごしていた。善吉のこの心情は、この道の信仰に引き寄せていただいている私たちの多くが時折、抱く思いと重なるよう

に思われる。おたすけに出ないでいると、何となく気分がすぐれなかったということは、この先人の心が自分ではいまだ意識していなかったものの、「人をたすける心」で互い立て合いたすけ合って生きることが、私たちの本来的なあり方であることを暗示している。

お道の教えに沿ったライフスタイル

そうした心情について、この先人が教祖に尋ねたところ、教祖は「あんたは、これからおたすけを一条に勤めるのやで。世界の事は何も心にかけず、世界の事は何知らいでもよい。道は、辛抱と苦勞やで。」と言われた。教祖が言われた「たすけを一条に勤める」こと、「世界の事は何も心にかけず、世界の事は何知らいでもよい」という生き方は、まさにお道の教えに沿った神一条、たすけ一条のライフスタイルを教示している。

教祖はこの道の教えを信仰する人々に対して、「里の仙人」になるように言われたという。「里の仙人」の言葉によって示唆される生き方は、「里の」という語が暗示するように「在家」レベルで生活することを意味する。その生き方は常に心を澄ませて、教祖の教えに沿って、神一条、たすけ一条の心で生きるように促されたことを教示している。「里」すなわち世俗社会のなかで生活しながらも、この道の信仰者は決して世塵にまみれることなく、「仙人」のように澄んだ心、神一条の心で日々を生きる。そこに、いつも喜びに包まれた生活を送ることができるようになる。宗教学的に言えば、俗なる空間に生きながらも、聖なる空間に生きることが肝心なのである。

このように「おたすけを一条に勤める」という生き方は、教祖が「道は、辛抱と苦勞やで」と言われるように、そこには常識や世間の生活慣習とのギャップもあって、こうした道を通ること自体、それなりの辛抱と苦勞を伴う。それは真実の道を通るための辛抱であり苦勞であって、私たちが日々、ふつう一般的に用いている「辛抱」とか「苦勞」の意味ではない。この逸話において、教祖が「道は、辛抱と苦勞やで」と言われた言葉には、日常的な意味を超えた深い意味が込められている。つまり、私たちがどのような状況にあっても、俗にいて俗に墮すことなく、常に親神のご守護に包まれて生かされて生きていることの喜びをもって、互いにたすけ合いを実践していく。そのことによって、社会そのものを少しずつ陽気ぐらし社会へと立て替えていくことができると言えるだろう。

親神にもたれて生きる

すでに少し触れたが、善吉は明治20年、30歳のとき、身上のさわりをいただいた。そのとき、「おさしづ」をお伺いして、善吉は「おさしづ」のお言葉をいただいている。親神は「いかなる処も、何かの処もどうい日もある」と言われ、どのようなときにも、「神一条いかなる道も聞き分けよ」と諭される。さらに「神の道」が「天然自然の道」であり、「誠の道が天の理である」とも諭されている。この「おさしづ」のお言葉に込められた意味は、この逸話の内容と重なり合っている。このことは信仰論的に極めて注目すべき点であろう。この逸話は、お道の教えと信仰において、親神にもたれて生きるという生き方こそが、私たちにとって根本的な心の姿勢であることを教示している。